

《研究セミナー概要》

谷崎潤一郎の小説における〈手紙〉

アンヌ・バヤール＝坂井

小説の定義が「何を語るか」、そしてそれを「どのように語るか」、の両側面にかかっているとしたり、谷崎の場合、その小説の内容の一種の「派手さ」に比べて語りの側面の影が些か薄くなっているかもしれない。ところが敢えて語りの側面から谷崎作品を読みなおすと、多くの小説が一人称で語られており、一人称という叙述形態がさまざまな叙述形式を媒介にしている点が明らかになる。ここでいう叙述形式は、例えば聞き書きだとか、また日記体の利用などを指すが、その中でも谷崎が特に興味を持っていたと思われるのは手紙である。ごく初期の短編から最晩年の小説まで、数えきれないほどの手紙が様々な形で谷崎作品に現れることはどのような意味をもっているのだろうか。

ある作家にとって書簡体を用いることは何を意味するのだろうか。書簡体のように大きな制約を伴う文体をある作家が敢えて利用するということは、その制約に見合うだけのメリットを書簡体に期待しているのだと推測出来る。

ではその制約とはどのようなものなのか。大雑把に次の通りに分けられる。

一、人称の制約。手紙は原則的に一人称で書かれ、その受け取り手が二人称の対象として現れる。従ってまた、言説の *destinataire*（「受け取り手」、または「送られ手」）の存在が非常に大きく文章に投影されている叙述形態でもある。

二、形式の制約。テキストは手紙の形式をとらねばならず、また語りの中で手紙が引かれている場合にはまた何故そこに手紙が、といった存在理由も文章を重層化させつつ呈示しなければならない（これが私が見つけた／貰った／送った手紙だ）

等というように)。その場合、作品は一次的テキストと二次テキストの両方を以て成り立つわけだが、この叙述装置は、その重層化の正当化などのさまざまな調整を必要とする。

作家がこのような制約にも拘らず書簡体を用いる理由は時代によって異なるし、それぞれの作家によって異なることは言うまでもないが、谷崎潤一郎の場合それが特に興味を引くのは書簡体を多く用い、また様々な形で用いているからだ。谷崎にはそのようにして書簡体の可能性と制約の文学的效果を最大限に活かすといった文学的意図が認められ、それはもしかしたら書簡体を彼の「書く欲望」の徴候として読み取ることが出来ることを示唆しているのかもしれない。

「書簡体」とは実に多様なテキスト現象を総括的に意味している。

一、あるテキストが最初から終わりまで手紙によって構成されている場合と、語りの中に手紙が挿入されている場合がある。

二、テキストが手紙によってのみ形成されている場合には、それが一通の手紙で構成されている場合と複数の手紙で構成されている場合がある。そして後者なら、往復書簡である場合（つまり一人以上の書き手によって手紙が書かれている場合）と一人の書き手の複数の書簡によって構成されている場合とがある。

三、語りの中に手紙が挿入されている場合、その手紙の全体が要するに引用されている場合と抜粋として引用されている場合があり、それが語りの構造上演出されている場合とそうでない場合がある。

四、また、その手紙が筋の展開上二次的な場合と、逆にその展開の要となる場合とがある。

このような要素に付け足さねばならないものとして、

五、作家がその手紙の書き手、送られ手、或は受け取り手として文章内に介入しているかどうか。これはもちろん現実には作家が手紙の書き手か送られ手、受け取り手であるか、といった点を指しているのではなく、文章内で「作家」として紹介されている、または暗黙に作家だと看做されている、ある「登場人物」がその手紙の書き手か送られ手、受け取り手として定義されているか、といった点を指す。この要素のヴァリアントとして、特に作家として特定されていない語り手がその手紙の書き手か送られ手、受け取り手であるか、といった点を挙げることも出来る。ここで敢えて送られ手、受け取り手の違いに拘るの

は、例えば、作家が或る人物に送られた手紙を手に入れ、紹介するといった装置も考えられるからで、その場合、その手紙の送られ手はその人物であり、受け取り手は作家、もしくは語り手、ということになる。また、内包された読者、もしくはテキスト外の読者がその手紙の受け取り手、または手紙を引用している一次的テキストの受け取り手としてその言説装置内に位置付けられているかどうか、といった点も考慮するべきであろう。

このような様々な要素を通して問題化されるのは語りの発信源であるものと送られ手、受け取り手の関係の様々な在り方、距離の設定の仕方、だといえる。

六、手紙の形式的な様相。文章が始めから終わりまで手紙に構成されていようと、語りの中に挿入されていようと、それが手紙の形式（頭語、挨拶、結語、日付、等）を踏襲し、わざわざ書き記している場合と、内容中心に、形式にこだわらずに展開したり引用されていたりする場合がある。

このような様々な要素を考慮すると、書簡体の面白さの理由の一つが手紙の形式的な制約と、語りのレベルや担い手に関する制約の緊張関係にあるのかもしれない、といった仮説を暫定的に示すことが出来るかもしれない。

谷崎潤一郎はその初期作品においてすでに書簡体を利用し、その可能性の探索を始めている。一九一七年に発表された奇妙な書簡体小説、「ラホールより」がその良い例である。これはインドに住む吉田覚良なる人物が日本にいる作家（この作家の名前は示されていない）宛てに書いた手紙によって構成されている。その手紙を通して吉田はインドの珍談を語り、その作家のインドへの旅行を促そうとする。インドに足を踏み入れたこともない谷崎はここで書簡体の内包する距離感を利用しフィクション性をいくらか緩和させながら、相当奇抜なフィクションを演出している。また、ここで重要なのは、谷崎が手紙の形式的な制約を守っており（文章は候文で書かれており、「謹啓」で始まり、その末尾も形式に従っている）、読者がそれによりこのテキストをすぐに書簡体のものとして認識出来ることだ。書簡体は実際の手紙ではなく、またその物理的な様相も現実の手紙（一枚、または数枚の紙に手書きでしたためられており、印刷されたものでない、等）とは異なっているにも拘らず、現実の手紙であるかのように記されており、従って読者との間に交わされる読書契約も特殊なものになる。つまり、読者は現実の

手紙を読んでいるのではないと知りつつも、あたかも現実の手紙を読んでいる（と信じている）かのように振る舞うことを要求される。そしてこの契約は作者が手紙特有の形式を用いれば用いるほど円滑に機能する。

この小説が始めから終わりまで一通の手紙によって構成されているなら、次の年、一九一八年に発表された「前科者」では語りの中で手紙が単に、そしてごく部分的に引用されている。ここでの引用からは手紙の形式的装飾は省かれており、その手紙の文もただ鍵括弧付きで引用されているだけに、語り手がその叙述の中でこの文を「手紙」と定義していなければそのように判別されるかも疑わしい。同じように、一九三六年に発表された「猫と庄造と二人の女」にも手紙の引用が、それも小説の冒頭に見られるが、それは鍵括弧なしでなされ、その書き手がその文章を「手紙」と定義し、また三人称叙述でもその文が「手紙」と定義されているからこそ、読者はそこに書簡体を認めることになる。ここで谷崎が求めている文章上の効果は、小説が機能し始めるために必要な最低限の情報を、単なる三人称叙述では聞かせることの出来ない「肉声」を通して読者に与えることにある。そして一人の登場人物の手紙の引用がその肉声を読者まで届けている以上、小説の幕開けにポリフォニーをもたらしているといえる。

さて、次に挙げるのは始めから終わりまでそれが手紙によって構成されていながらも、そこにその虚構性を隠蔽するような処置が施されていない場合である。例えば一九二三年に発表された「アヴェ・マリア」はある人物が自分を捨てた若い女優へ送りつける数通の手紙によって構成されているが、その文章内で数回語り手が自分の叙述を「手紙」と定義していないければ、これは二人称で表現される叙述の「語られ手」への語りかけを含んだ単なる一人称叙述と読めないことはない。これは書簡体小説が一人称の語り手が書き手であるという叙述形態の一例でしかないことを明確に示している。また、一九二六年に発表された「青塚氏の話」でも同じような書簡体の使用が認められる。ここでは手紙、と言っても遺書が中心に据えられていて、それは谷崎が手紙の種類にも興味を持っていることを意味する。その形態から言えば遺書も、読まれる時には原則的にもう書き手がこの世に存在しない、という特殊な書簡の一種である。この「青塚氏の話」では例えば登場人物間の会話が多く遺書に「再現」されていること等から書簡体の様相が一人称叙述の大きな枠に完全に覆い隠されている、といえるかもしれない。

しかし書簡体が一人称叙述に吸収されるとは限らない。一九二六年に発表された「友田と松永の話」は一人称叙述によって話しが進められている。その一人称の語り手は作家であることが判明するが、その名前が「K君」として示されている以上、谷崎との重複は文章により否定されている。この語り手がある日、ある女性からその夫に関する問い合わせの手紙をもらう。「その手紙の内容は、かなり長いものであるが、それがこの話の骨子であるから、煩雑を厭わず下に掲載することとしよう」と書き手は記し、その手紙の形式的特徴を「再現」している。その後にも語り手がその女性に返信を出したり、その女性からまた手紙が来たことが記されるなどして、数回この小説に手紙が登場するが、その場合には手紙の全文が「掲載」されるのではなく、抜粋されたり、鍵括弧付きでありながらも書き手に文体を変えられたりしている。結果的には、相当目まぐるしく書簡体と叙述体との距離が変化し、それはこの小説の中心的テーマがある人物の目まぐるしいアイデンティティーの変化にあること故、両方が響応していると言えるかもしれない。ここで谷崎は形式と叙述形態からいって信憑性を具えている書簡体を用いることで、信憑性の薄い話を「本当らしく」見せようとしているのではないだろうか。谷崎は形式的に、或は文体的に特徴のある文章を引用する振りをするによって生ずる文章の信憑性に昔から気づいているし（例えば一九一一年刊の「秘密」にある手紙を参照）、以後も多くその手法を用いている（例えば一九三三年刊の「春琴抄」の中の「もずや春琴伝」の機能）。「友田と松永の話」の冒頭で手紙の引用を使っているのは、やはり嘘っぽい話を本当らしく見せる装置と看做してよいであろう。

手紙の引用が「本当らしさ」を増す、という手紙の効用は一九二八年に発表された「卍」にも見られる。第七章で、その話し手は、その話の聞き手であり、またその話を元にして小説を書くであろうと期待している「作家」に手紙を見せ、作家はその手紙を書き記すのだが、その際、手紙の形式的様相を踏襲するだけでなく、その手紙の物質的特徴を細かく括弧内の作者註に描写している。この物質特徴に対するこだわりが、その特徴がそれ自体二次的であればあるほど、その本当らしさを強調するのである。

今まで挙げた例は、虚構性と信憑性、またはフィクションと現実、の交錯にいかにも谷崎がこだわっているかを示している。

では、その書簡体の特徴が文章を完全に征服するかどうか。

谷崎が生涯を通してのテーマであるフット・フェティシズムを真っ向から扱ったものとして有名な「富美子の足」（一九一九年発表）は、始めから終わりまで「谷崎先生」に宛てられている一通の手紙によって構成されている。そしてこの文章にはいかなるメタ・テキスト化の処置も施されていない。また、手紙の書き手はこの話を元に「谷崎先生」が小説を書いてくれていることを熱望していることを繰り返して強調している。読者はその話を信じる理由として、それが虚構なら、読者は手紙ではなく、そこから加工された小説を読まされているはずだ、と思うように仕向けられているのだ。谷崎はこの作品では手紙が本文を覆い尽くしていることから、フィクションの中の書簡体の可能性をその限界までに利用している、といえるかもしれない。

では、その限界を文章が超えるかどうか。いかにも不可思議な現象が生じ、その見事な例が一九五〇年に発表された「A婦人の手紙」だ。この文章を構成しているのはある女性——A婦人、名前は泰子と言い、それを読者は手紙の署名によって知らされる——がその友人に送ったとされる三通の手紙である。その手紙は始め、転地療養をしている書き手がその日常の様子を書き記しているだけだが、徐々に頭上を通る飛行機の動きに、その操縦士の熱情的な意思表示を読み取る、と言った色狂的な過剰解釈の披露へと手紙の内容が展開して行く。そしてその展開はそれを示したいいかにも手書き風の絵によって支えられている。また、手紙の書き手はその手紙の受取人である友人が「谷崎潤一郎」と知己であることから、「谷崎潤一郎」がその飛行士との関係を小説にすることを願っている。ここで手紙の一人称は偏執狂的な独り言へと変化し、手紙の持つコミュニケーション機能は形骸化してしまい、だからこそ手紙の形式と物質的様相しか残らない。ここでの「手紙」は、その狂った内容から、その意外な外見からも、「手紙」の枠を超えているのだ、といえるかもしれない。

このようにして、「A婦人の手紙」で谷崎は書簡体の可能性の限界に挑戦し、それを超えているように見えるが、この文章がいかに奇妙であろうと、それが他の書簡体小説の延長上にあることは確かだ。ここでも、そのコミュニケーション性が空洞化してしまっているにしろ、一人称が利用されていることに変わりはなく、谷崎にとって、書簡体がその一人称の一つのヴァリエーションであることをあらためて証明しているのだ。いや、ヴァリエーションというよりは、頂点というべきかもしれない。「富

美子の足、「卅」、「A婦人の手紙」の三つの作品に現れる手紙が、同じようにある「作家」に、その内容を元にして作品を創出することを求めているのは偶然の一致、とは信じ難い。状況を略すると、作品内の登場人物「谷崎潤一郎」にその手紙が伝わる体験を小説にして欲しいと願っている人物を作家谷崎潤一郎が演出している、ということになる。それは書簡体が「書く欲望」としか名付けようのないものが最もあからさまに表現され、機能している文学的場所であることを示唆している。だとしたら書簡体は谷崎における一人称のヴァリアントであるだけでなく、その鍵をも握るものなのだとはいえるかもしれない。